

国立美術館 新収蔵作品における ジェンダーバランス

2020 – 2024 年度

国立4館の新規収蔵作家の男女比（作家数ベース）

※ 各館の活動報告（年報・館報）をもとに新収蔵作家の性別を判定・集計

2026年6月29日

本資料について

調査対象・データ源

国立4館（東京国立近代美術館・京都国立近代美術館・国立国際美術館・国立西洋美術館）の活動報告より「新収蔵品」の情報を分析
対象期間: 2020–2024年度

集計単位

作家数ベース（その年度の収蔵作家を1人=1カウント）。
※大量寄贈の影響を受けにくいため、この集計方法を選択

2通りで集計

- ① 美術のみ
- ② 美術＋工芸

比率（分母）の扱い

比率の分母は性別が判明した作家（女＋男）。
匿名・作者不詳・グループ（複数作家）は分母外とする。

「購入のみ」の定義

購入作品を1点以上持つ作家を「購入のみ」に計上。寄贈のみの作家は購入の集計から除外する。
※購入と寄贈が行われている作家がいた際の集計ルール

主要な発見（美術のみ）

国立国際美術館

48%

女性（2024年度）

13%(2020)→48%へ急上昇

東京国立近代美術館

21%

女性（2024年度）

約21%で横ばい

京都国立近代美術館

4%

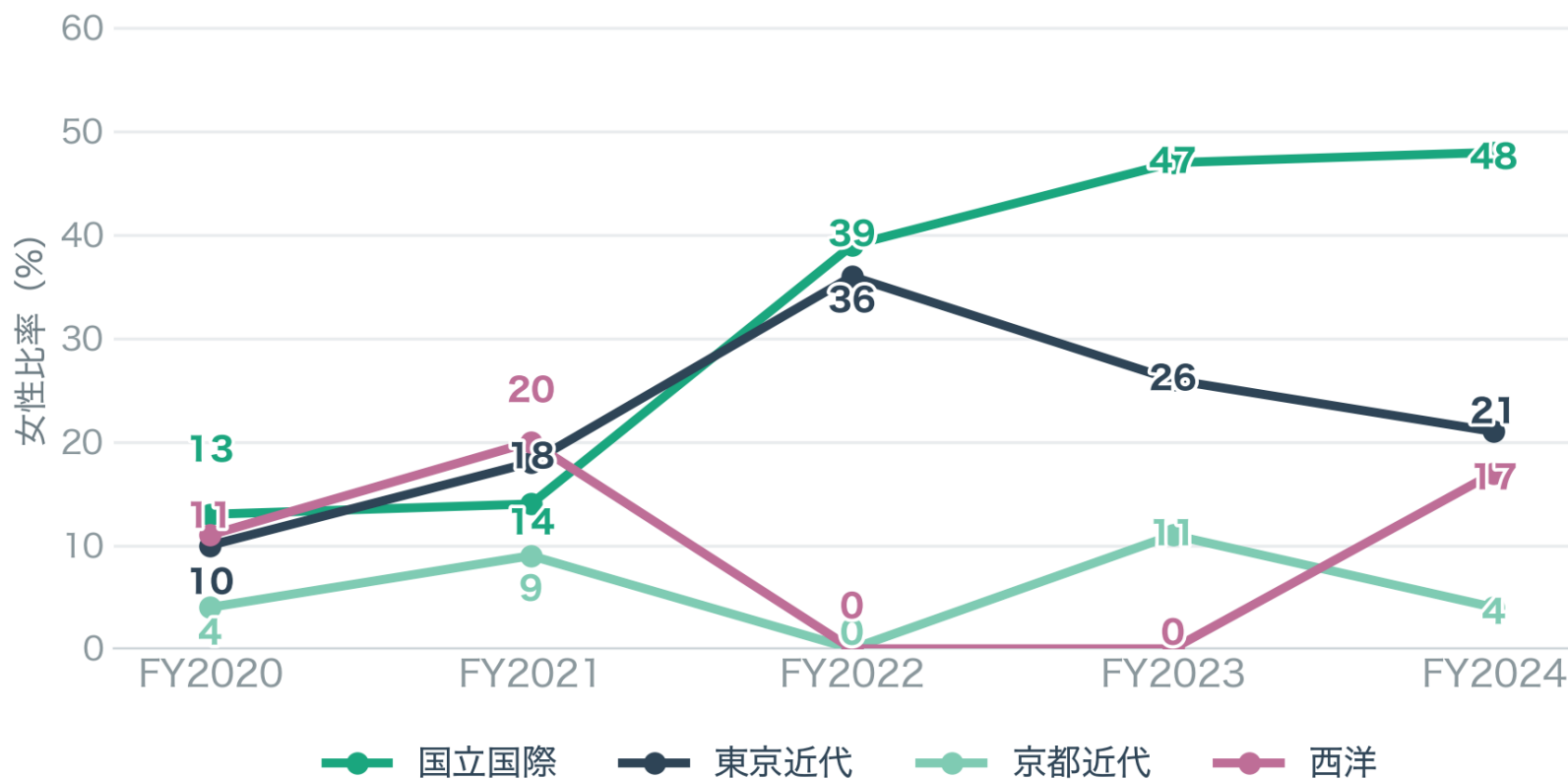
女性（2024年度）

歴史的日本画中心で最低水準

国立西洋美術館は新規収蔵の母数が小さく比率は不安定だが、2022年に収集方針へ「女性作家の作品も積極的に収集」と明記し、2024年度に女性画家ラヴィニア・フォンターナとフェーデ・ガリツィアを購入。館の意思が収蔵に表れ始めている。

女性比率の推移（美術のみ）

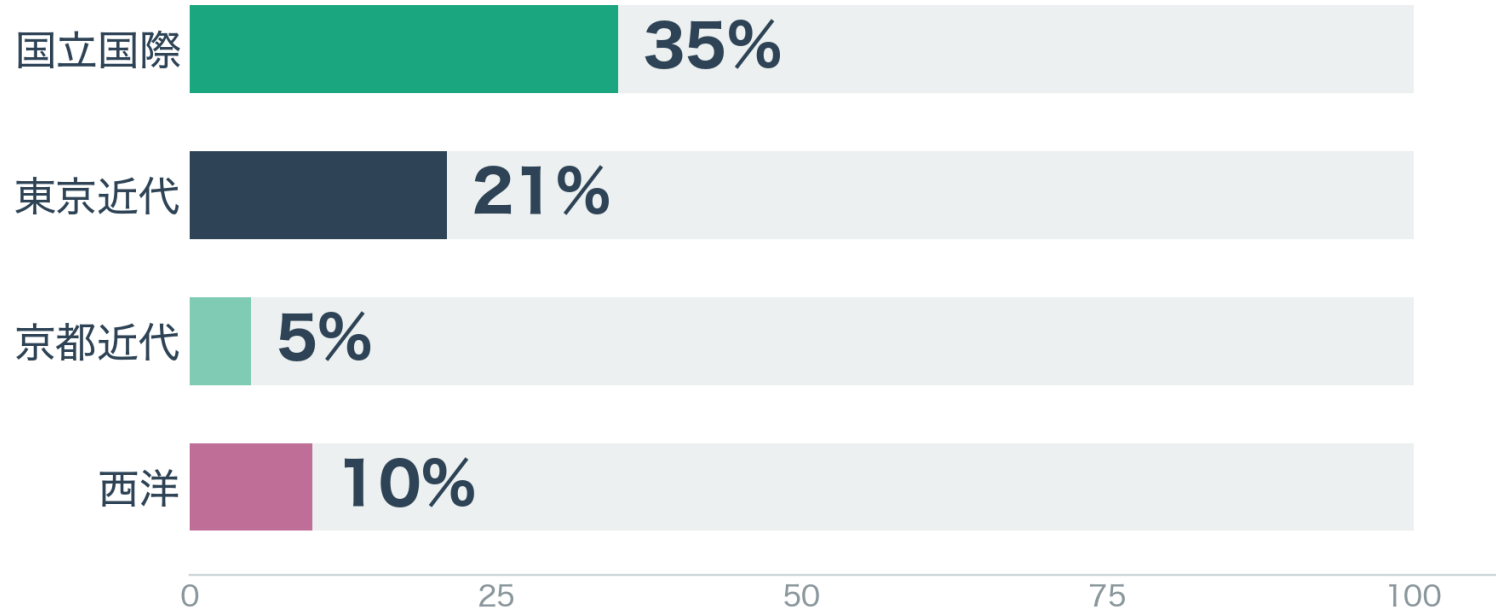
国立4館・新規収蔵作家の女性比率（2020–2024年度）



国立国際は13%→48%へ急上昇し均衡に接近。東京近代は約20%で横ばい、京都近代は最低水準、西洋は母数小で変動が大きい。

女性比率（5年通算・美術のみ）

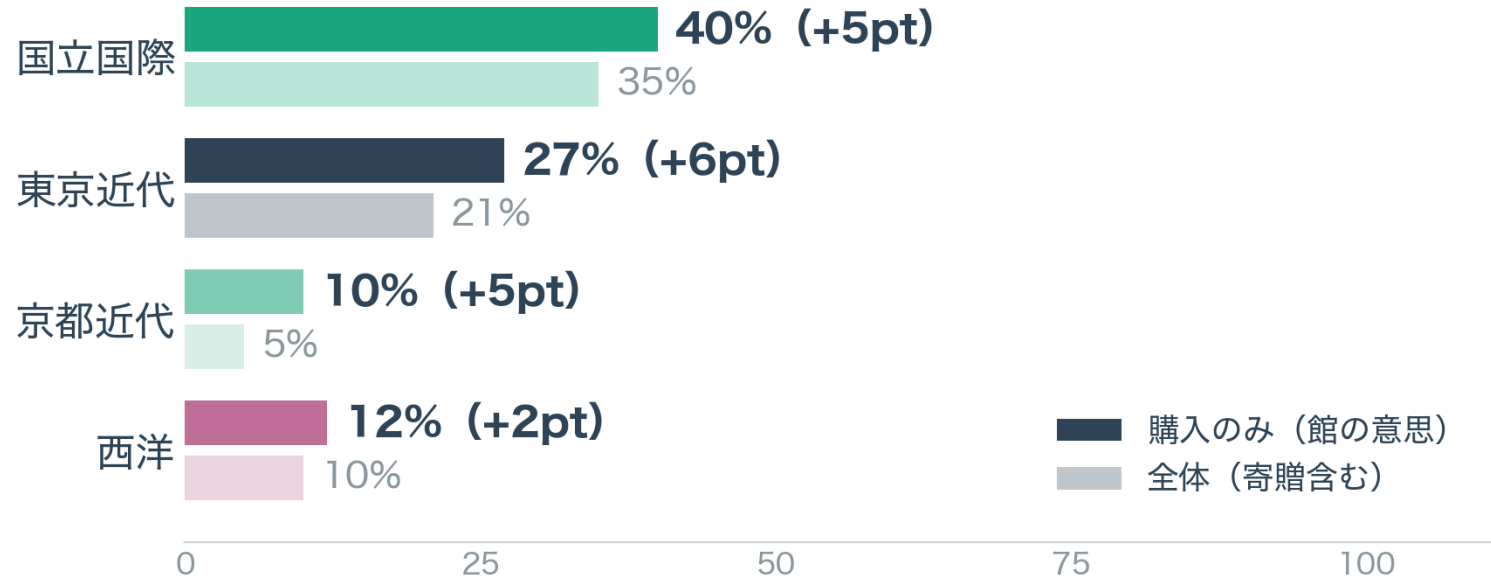
2020–2024年度の通算ユニーク作家に占める女性の割合



通算でも国立国際が最も高く京都近代が最も低い。分母外（匿名・作者不詳・グループ）は美術のみでは各館ごく少数で、比率の信頼性は高い。

購入のみで見る女性比率（5年通算・美術のみ）

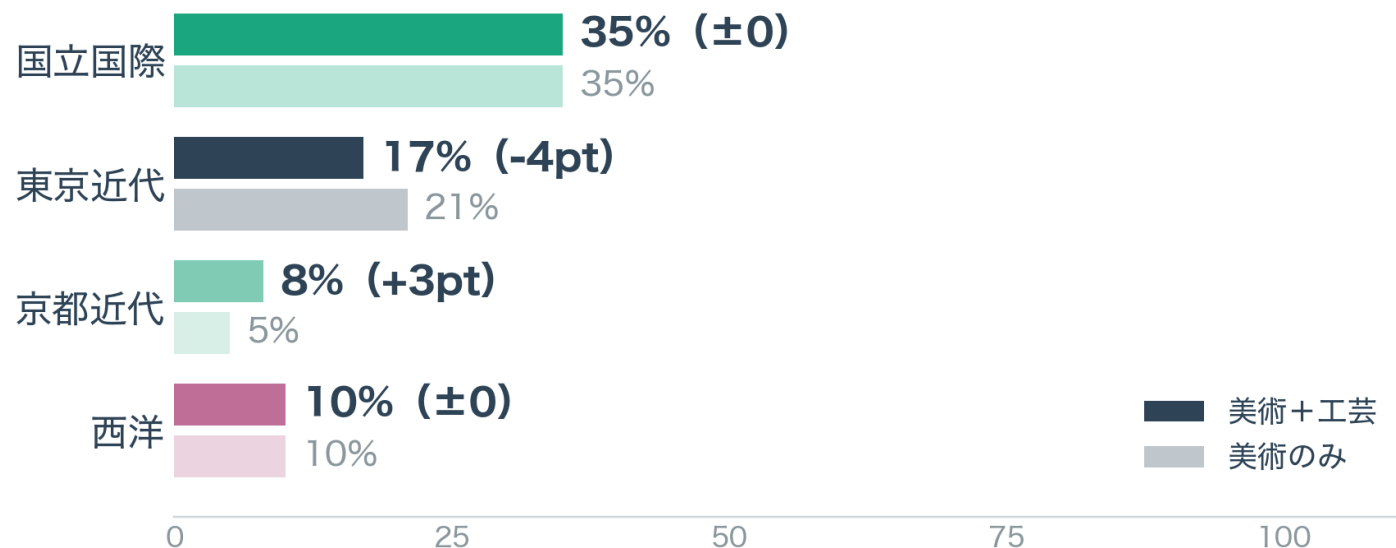
寄贈を除き、館が能動的に「購入」した作品の作家に占める女性の割合



寄贈を除く（＝購入のみ）と、全館で女性比率が上がる。館が「買う」意思では女性作家の比率が相対的に高い。特に京都近代は5%→10%と倍増し、寄贈に歴史的な男性作家が多いことの裏返しといえる。

工芸（クラフト）も含めると（美術 vs 美術＋工芸）

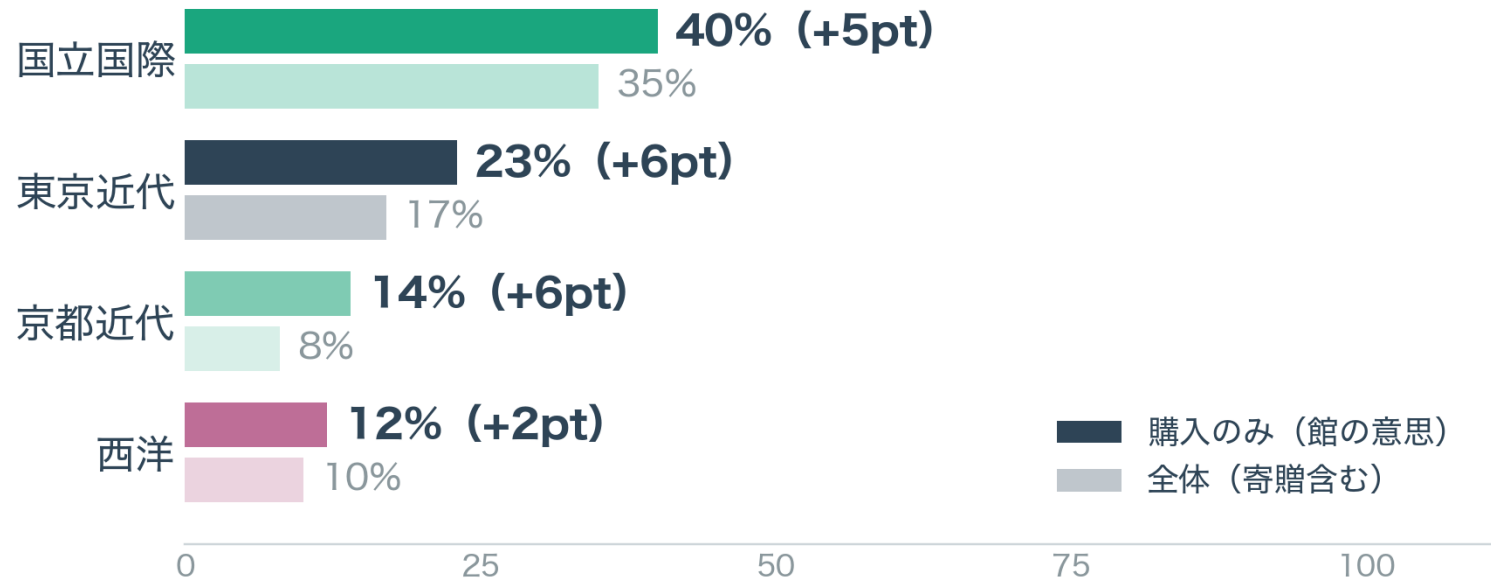
美術のみ と 美術＋工芸 の女性比率の比較（5年通算・作家数ベース）



工芸を含めると館で逆方向に動く：東京近代は下がり（21→17%）、京都近代は上がる（5→8%）。
東京は陶磁・漆工の男性作家（人間国宝級）が多く、京都は染織など女性の工芸家がいるため。
国際・西洋は工芸が少なく不変。

購入のみで見る女性比率（5年通算・美術+工芸）

工芸を含めても、寄贈を除く「購入のみ」で女性比率がどう動くか



工芸を含めても、購入のみ（寄贈を除く）では全館で女性比率が上がる。

特に京都近代は8%→14%、東京近代は17%→23%へ。

館が能動的に「買う」場面では、美術・工芸とも女性作家の比率が相対的に高い。

まとめ

館による差が大きい

女性比率は国立国際約48%～京都近代約4%（2024年度・美術のみ）と館で大きく異なる。また年によっても数字がブレやすく、長期的なトレンドで評価する必要がある。

国立国際は急上昇

国立国際は5年で13%→48%へ。現代美術中心の館で女性作家収蔵が加速。

西洋は方針を明文化

母数は小さいが収集方針に女性作家を明記し実際に購入。定性的に重要。

工芸込みは館で逆方向

工芸を含めると東京近代は下がり（21→17%）、京都近代は上がる（5→8%）。陶磁・漆工の男性作家と、染織など女性工芸家の差。

購入では全館が上昇

寄贈を除く「購入のみ」で見ると、美術・工芸とも全館で女性比率が上がる。

本調査に関する問い合わせ先

一般社団法人NMWA日本委員会

ジェンダーバランス調査チーム

survey@nmwa-japan.com